

夢と希望にあふれる島の実現に向けて

長島町長 川添健

獅子島の概況

獅子島^{しし}は、本土から長島を経て架橋されている諸浦島^{しようら}の北東約四キロメートル、鹿児島県の最北端に位置しています。海に面した四集落で構成され、人口六四七人、世帯数二六八世帯（令和二年国勢調査）の有人島です。

獅子島の片側港^{かたがは}と諸浦島の間を定期フェリーが一日八往復、不定期フェリーが五往復運航しているほか、幣串港^{へぐし}と熊本県の水俣港^{みなま}を結ぶ旅客船も三往復しています。また、同県天草下島の中田港との間にも航路があります。

島では漁業と農業が盛んで、海・山の幸にあふれています。

透明度が高い海岸線では、地元で「オサ」と呼ぶ良質のアオサが採れます。周辺海域は好漁場で、アラカブ（カサゴ）やマダイ、タコなどが捕れるほか、ブリやタイの養殖も盛んです。また、斜面のいたる所で紅甘夏やデコボン、ボンカンなどの柑橘類を栽培しており、その味には定評があります。

しかし、地理的・地形的な条件が悪く、農業基盤や道路、生活環境などの整備が取り残された形となっており、高齢化や人口減少が町内で最も顕著です。これらは第一次産業の低迷とともに、地域活力の低下をまねく要因となっており、地域の将来が極めて深刻な状況にあるといえます。島の大部分が山林で、平地はどの集落も海岸線にわずかに広がるのみ、耕

地面積は島全体の四・三パーセントに留まっています。農家の約八割が農業所得より兼業所得が多い第二種兼業農家で、戸数は年々減少傾向にあります。平均経営耕地面積は、〇・五ヘクタールと零細です。

四面を海に囲まれた環境を活かし、これまでに養殖漁業を推進し、浅海漁場造成などを行なってきましたが、エサ不足や魚価の低迷、環境汚染や近年の二度にわたる赤潮被害などの問題も生じています。

このほか、獅子島は町内で唯一の有人離島（離島振興対策実施地域）であることから、産業面以外にも救急患者の発生時の搬送、高校進学、就職、結婚・子育てなど生活のすべてにわたり、住民は本土にはない不安と悲哀を感じています。本町では、これらを解消するために架橋の実現を大きな目標として掲げ、平成二十四年から「夢追い獅子島架橋基金」への積み立てを行なっています（後出）。

特徴ある人材育成施策の展開

長島町では、小規模である利点を活かし、幼小中一二年間の一貫教育を実施しています。小学生の無人島でのヒラメ放流や遠足、中学生の釣り大会や魚捌き体験、小中学校合同での和太鼓演奏など豊かな体験活動も行なっています。



獅子島架橋の早期実現を訴えるバナー。

課題は、教職員の定数制限で、とくに中学校では教科の専門教諭が配置されないこともあり、公立義務教育諸学校の学級編成基準を改め、自治体ごとに柔軟な対応が採れるようにする必要があると考えています。

地元の人材の確保に向けては、「ぶり奨学金制度（町外へ進学後、Uターンすれば返済不要）」などに力を入れています。財源としてふるさと納税をはじめとする寄附などを活用していますが、さらなる制度の充実のために、辺地債（辺地対策事業債）や過疎債（過疎対策事業債）を活用できるようにしていただきたいです。

また、全国から集まった現役大学生が、学習法などを町内の中学生に教え、進路相談にも応じる「獅子島の子落とし塾」を、これまでに三〇回以上開催してきました。講師募集のための財源の継続確保を求めたいと思います。

民間事業者との連携による空き家の活用

獅子島では、これまでに島の男性と島外の女性をマッチングさせる取り組みを実施し、六年間で六組のカップルが誕生、二人の産声があがりました。現在、島の小学生は一人ですが、一〇年後は二五人にまで増えるという試算をしています。若干ながら、Uターン者も増えてきています。

しかし、島内に居住できる家がほとんどなく、これまで整備してきた公営住宅も数に限りがあるため、未利用の空き家をなんとか活用したいと考えています。平成三〇年に空き家改修補助制度を拡充（補助率の高上げへ1/3→2/3）、借主によ

る改修も補助対象に追加など）したことで、空き家の活用は進みつつあります。また従来、物件の仲介は町が行なっていたが、現在は民間の不動産業者と提携しています。

チャレンジができる島を目指して

海外の離島振興をみると、例えばクロアチアでは島の住民向けに発行するIDカードで車両の優先輸送などの権利認証がなされていると聞きます。日本でもマイナンバーカードの活用を工夫することで、島の住民向け施策が講じられるのではないのでしょうか。

獅子島で町が加温ハウスを整備し、柑橘栽培農家の「けいぎょう継業」を実現した例があります。また、移住者にワカメやヒジキ、アカモクなどの餌やりが不要な養殖に取り組んでもらい、その刈り取りを来島者に体験メニューとして提供するなど、観光の視点も加えることで面白い動きになると思います。

島で展開している高齢者向け配食サービスについて、現在は本土側（長島）で調理して運んでいます。例えば、島でアンテナショップを営む事業者が、島内で食事を用意できるようにすれば、新しい仕事の創出にもつながります。

これからの島は、今あるものを生かしながら、新しいことに挑戦していく必要があります。チャレンジ精神を持つ人材

を育成し、チャレンジができる環境づくりを目指すことで、島の活性化が図られ新しい産業などが生まれることを期待しています。

全町民が願う「獅子島架橋」

昭和四九年に長島と本土を結ぶ黒之瀬戸大橋が開通し、私たちの生活は劇的に変わりました。平成八年の長島本島と伊唐島を結ぶ伊唐大橋が開通したことにより、町内で架橋されていない有人島は獅子島だけとなっています。

獅子島架橋建設に向けては、獅子島の住民のみならず、全町民が一体となって国や県などの関係機関に「町民みんなの願い」として要望していく必要があります。そこで、町、議会、漁協、農協、商工会など多くの組織が加わり、平成六年一二月に「獅子島架橋建設促進期成会」を立ち上げ、長島町が一丸となって県や国への陳情・要望活動を継続して行なっています。

しかし、架橋事業は町の試算で四百億円を超える巨大プロジェクト。具体的な動きがないまま、時が過ぎていく中、架橋構想をさらに進展させるため、毎年、町民一人当たり一万円、三〇年で三〇億円の積み立てを目標に「夢追い獅子島架橋基金」を平成二四年に創設しました。町の予算はもとより、

町民からの寄附やふるさと納税による全国の支援者からの寄附が集まり、令和三年度現在、計画を大幅に上回る一五億七三〇〇万円を積み立てることができています。

県内では薩摩川内市さつまがわうちの獅子島こしじまで悲願の島間架橋が実現しました（詳細は本誌二六四号参照）。私も建設中の甑大橋を視察しましたが、架橋で住民の生活も劇的に変化するだろう、「獅子島架橋は絶対必要だ。甑の次は獅子島だ!」と、架橋建設への思いを一層強くしました。県民の皆さんに獅子島を知っていただくため、令和三年度に南日本新聞へ全面広告を出したところ、期待以上の反響がありました。

また、今年度より島の主要道路である獅子島一周林道を町道に昇格し、道路改良事業などを行ない、架橋実現に向けての施策を実施していく予定です。

観光交流人口の増加や経済の活性化の取り組みなどを進めるとともに、「将来を担う子どもたちには夢を」「働く人々には活力を」「高齢者や弱者、子育て中のかたがたには一人ひとりを大切にする福祉」の充実したまちづくりを推進するためには、獅子島への架橋建設が必要だと考えています。

改正離島振興法への期待

獅子島の住民の多くはミカン農家で、経済対策がもつとも



長島町役場の前には「長島町民の役に立つ人のいるところ」との標語が掲げられている。

重要です。農業分野における水産庁の「離島漁業再生支援交付金」のような交付金制度の創設、定住体験住宅などの移住者の受け入れ環境整備支援など、島の課題解決に資する施策を積極的に講じていただきたいと考えています。

この度の離島振興法の改正にあたって、「架橋促進」の考え方を盛り込むなど、架橋事業によって離島の隔絶性を解消し、架橋後も継続して振興を図るという発想の転換が求められると思います。同法が獅子島架橋の実現に向けた、大きな一歩となることを期待してやみません。

これまでも手厚い支援をいただきましたが、離島振興は永続的に進めていくべきものです。そこで、過疎債や辺地債で足らざる部分を補うため、離島の特性に応じた離島地域のみで活用できる財政措置として、「離島振興事業債（仮称）」の導入を強く願っています。

私は、「夢へのチャレンジ、できない理由ではなく、できる方法を考える」を信念としています。

夢を描かなければ、実現への挑戦はできません。夢を描けば情熱が湧いてきます。情熱は行動に移り、行動すれば必ず成果がともないます。必ずそうなると思っています。

■

川添 健（かわぞえ たけし）

昭和19年生まれ。同38年旧東町役場入庁、企画財政課長、総務課長、収入役を歴任。平成15年から東町議会議員、同17年から東町長、同18年3月から合併後の長島町長（初代）を務める。現在5期目。